国際日本文化研究センター創立の頃
歴史人口学・家族史の国際比較研究プロジェクトの出発

速水　融

慶應義塾大学で経済学部長を仰せつかっていた一九八九年のある日、突然梅原猛先生から連絡を受けた。どういう用件か分からないまま帝国ホテルのロビーでお会いすると、なんと「速水さん、新しく京都にできる国際日本文化研究センターに移って来ませんか」といきなり言われ、驚倒した。

私は理論経済学から離れ、経済史からも一歩抜けだし、だいぶ前から歴史人口学を自分の研究分野とするようになっていた。もし日文研が経済学、あるいは経済史のポストの適任者を求められているのならば、自分には到底勤まらないと申し上げた。

数日後、なんと梅原先生が三田の私の研究室に来られた。当時、私は全国の江戸時代の人口史料―多くは「宗門改帳」をマイクロフィルムで収集し、それを整理用紙に転記し、人口統計を作るという作業を大学院生やアルバイトの方々と共に進めていたので、かなり広い面積の研究室を使っていた。そして生意気にも「私の研究には、これだけの人員、広い部屋が要るのです」と説明した。先生は、その時は何も言わずにお帰りになり、数日たってまた電話で、「速水さん、ぜひ日文研に来て下さい」とのことである。

さあ大変、真剣に悩む事になった。学部長の職を途中でやめるわけにもいかないだろう。相

談すべき野村兼太郎・高村象平両先生はもう逝かれている。私は思い切って石川忠雄塾長に相談した。塾長は、私も日文研ができるとき多少係わりましてね、と無縁ではないことを言われた。しかし、学部長の任期を勤める事はきつく申された。また、「移るなら日文研に塾の学問を持って行って下さい」と励ましの言葉も戴いた。これで私の気持ちは治まった。

国立の研究機関というのは、どういうところか、想像も出来なかった。実は大型の研究費が交付される可能性のある状況だったので、研究に専念できるなら定年までの貴重な五年半を思い切り歴史人口学に打ち込める、と考えるに至ったのが何よりも大きかった。

かくて私は定年前五年半（選任）プラスもう五年（兼任）、併せて一〇年あまり、二〇世紀最後の一〇年間を京都で過ごすことになる。時に一九八九年九月末、三五年半に及ぶ慶應義塾大学を辞し、京都の日文研に移る事になる。六〇歳寸前のことだった。

京都へ来てみると日文研はまだ仮の住まいで、本建築ができるまでは専ら「京都」を知るべく、町中を回ることにした。京都には他にはない「文化財」の集積がある。それは梅小路蒸気機関車館である。何しろ私は幼稚園時代に、日光駅で初めて目の前を仕業する「ロコモー」に取りつかれ、ダダをこねて日光見物をせず、誰かに付いて貰って駅の傍から離れなかった「三つ子の魂」の持ち主である。

京都に赴任した頃には、もう蒸気機関車はリタイヤして、所々で「見世物」的に運転されている状態だったが、私はそれには堪えられず、動かなくてもいいから、昔日のロコモーを多種揃える梅小路こそ蒸気機関車の聖地だと思ってきた。何はおいてもまず訪れ、敬意を表すべきである。最初が同じ「梅」の字であることに免じてお許しを乞おう。もう一つの「梅―梅」連関である。

一九九〇年四月、研究室棟が完成した。私の研究室（個室）は南側にあり、京都の街からすれば西側の、いわゆる西山の山裾まで見える絶景が目の前に広がる特等席であった。東京では、窓からみえるのは水平と垂直、つまり直角からなる風景であるが、日文研の研究室からは、目の前に斜めの稜線が横切っているのである。その斜めも決して直線ではなく、やわらかにふくらんだり、へこんだりしている。要するに不規則な「ななめ」である。こういった不規則性が目の前に展開する場所で、日のある間の大部分を過ごすのは生まれて初めての経験であり、まず仕事を始める前に、斜め読みならぬ風景の斜めぶりをゆっくり楽しむことにした。

そのななめの見える部屋に長く愛用している愛用しているキャノワード四五というワープロ機を置き、持ってきた図書資料類を並べ、私個人の研究室は整った。そして嬉しいことに、一九九一年度より五年間の大型研究費（創成的研究）が採択され、九〇年度はその準備費としてなにがしかの研究費もいただくことになった。「創成的」とは、文部省が毎年一件に限って採択している研究費で、毎年一億円、五年間を基本とし、これによって当該研究分野の飛躍的発展が期待されるものであった。また、日本における研究を国際的レベルに引き上げるべく、国外の研究者とメンバーを組んだり、国際学会で報告したりすることを大いに奨励していた。

ということで、一九九〇年は研究プロジェクトを構築すべき一年となった。まずこのプロジェクトであるが、私一人では手に余る。とくに家族の史的研究を進めている方に是非来て戴きたい。東大を出て、その時点では同志社の女子大学で教鞭をとられている落合恵美子さんが適任ではないかと考え、九四年から日文研の専任として来て戴くことになった。落合さんは、プロジェクト終了後、京都大学文学部に移られ、ご自身のアジア家屋史研究とともに、多くの若手研究者を育てられている。

また、この研究では大型コンピュータを用いる大量データの処理が不可欠である。幸い日文研には小野芳彦助教授がコンピュータ専門家として居られた。

さらに幸運だったのは、日文研が助手のポストで一人公募をしたことである。シアトル市にある州立ワシントン大学で学位を得た社会学の黒須里美さんが採用された。私はこの人ならば、英語は堪能だろうし、社会学でも実証的研究ならば立ち上げる大型プロジェクトに適任だろう、と考え、強く推挙した。現在黒須さんは母校麗澤大学で大学院委員長をつとめ、比較人口・家族史研究の事務局長として国際的な活動をされている。日本の歴史人口学・家族史研究のセンターは麗澤大学にある、と言っていいだろう。ポーリン・ケントさんとともに、助手として、この上ない協力者であった。

かくしてプロジェクトの本陣は整った。より難しいのは、国外の研究者を決めることである。国内を含め、一人一人名前を挙げ、どのようにしてメンバーに入って戴いたかを述べることは避け、なぜ日本を含んで五つの国が研究対象となったかを明らかにしよう。

フランスで始まり、イギリスに渡った歴史人口学は、キリスト教社会ならば、どこにでもある教区簿冊（Parish Register）を用い、特にルイ・アンリの考案した家族復元法（Family Reconstitution）を用い、出生と死亡、結婚に関する人口学的指標の検出に成功した。しかし、それだけでは家族・世帯のことはわからない。イギリスのケンブリッジ・グループを創設したピーター・ラスレットは、戸籍簿型の資料の発掘に力を入れたのも、教区簿冊だけでは限界があることを見抜いていたからである。

われわれの「ユーラシア人口・家族比較史プロジェクト」では、最初から、人口学的観察にとどまらず、同時に家族・世帯の在り方や変化の分る史料を有する国・地域を対象としたの

で、日本の他、中国（遼寧省）、イタリア（北部）、ベルギー（リエージュ近傍）、スエーデン（最南端）の計五つの社会である。日本以外では、それぞれの国のある部分であって、国の名をつけて呼ぶことははばかられる。その日本でも、研究目的に沿って利用可能なのは、北から会津藩領、奥州二本松藩領、信州諏訪藩領、天領大垣藩預り地、長崎近傍の一村落、天草一村落というようにバラバラに散っている。現時点における史料調査の結果、最も研究目的にかなうものを抜き出すとこのような状態になってしまうのである。

国外の研究者は、準備の一年間に直接お目にかかって、こちらの意図も伝えるべく、勤務校または学会報告の場に出向いて研究チームの編成を行った。

まず、アメリカのロスアンジェルスにあるカリフォルニア工科大学（Caltech）へジェームス・Z・リー教授を訪ね、清朝期遼寧省の人口調査簿を拝見し、その整理分析法も知ることができた。同じ漢字文化圏なので、史料はわかりやすかった。こちらの「Eurasia Population and Family History Project」の趣旨を説明し、是非参加してほしいという要請に快諾して戴いた。

ボルチモアで開かれていた学会に出席されていたジュネーヴ大学のジョージ・オルター教授は、ベルギー・リエージュ付近の一九世紀の戸籍簿型史料を用いてリエージュ近傍の歴史人口学研究を進めて居られる方だが、その学会に出て、そこで同様のお願いをし、快諾を得た。さらに、スエーデン南部の研究を進められているルント大学のトミー・ベングッォン教授は、大学に彼を訪問し、同様にプロジェクトへの参加を勧誘し、快諾を得た。ここでは、教会の全教区民を対象とする識字試験簿（聖書の読解力を調査する Examination Register を人口調査史料としている）を基礎史料として居り、原史料を見せて戴いた。

もう一国、イタリアには行けなかったが、人口学の大家M・リヴィ・バッチ教授に事情を書

簡で訴えたところ、マルコ・ブレスキ教授を中心とする研究者数名が、戸籍簿型の史料を用いて研究を始めている事を知らせて戴いた。利用史料は、教区簿冊と教会へ来る者の家族の記録 Status Animarum（魂の記録）である。

フランスとイギリスを歴史人口学の先進国だとすると、我々が対象となる地域を研究する研究者の勤務先は、先進国ではない。しかし、先進国にはなかった人口と家族を結合して捉え、意識的ではないが、人口学や統計学を駆使して一挙に先進国入りをする研究集団という装いをまとっていた。

これら五つの社会で作成された人口調査簿は、もちろん今日の国勢調査や行政資料と比べ正確度は落ちるだろう。しかし、住民台帳型史料として共通点をもつものであり、なるべく長い期間をカヴァーする良質の史料を、多くの地点について収集し、たとえば event history analysis のような手法を用いて比較史的に分析すれば、アジアの二社会、ヨーロッパの三社会の歴史人口学および家族史の比較研究が出来る。

かくて、国際日本文化研究センターは、国際研究チームによる共同研究の中心となった。日本国内のプロジェクト参加メンバー三五名、研究をサポートして下さるアルバイトの方々も決まった。一九九〇年四月、新しい建物が次々完成するなか、多分最も広い部屋を頂戴し、私は、気に入っているダンテ『神曲―地獄篇　第三歌』「Lasciate ogni speranza, voi, ch'entrate!（ここをくぐる者　すべての希望を捨てよ）」を記した横幕を部屋の入り口に掲げ、歴史人口学への途が如何に困難なものであるかを全員に言い聞かせつつ、本格的研究のスタートを切ったのである。梅原猛先生、有難うございました。

（国際日本文化研究センター名誉教授）